

原発不明肺門縦隔リンパ節がんの 長期生存の1例

藤原清宏

IRYO Vol. 63 No. 7 (427-430) 2009

要 旨

症例は53歳，男性．健診で胸部異常陰影を指摘され，国立病院機構静岡富士病院に入院となった．胸部CTで肺がんが疑われ，右肺門に腫瘤影を認め，縦隔リンパ節の腫大もみられ，CEAは182.9ng/mlであった．右上葉切除＋縦隔郭清を行った．病理診断では，右上葉内に腫瘍はなく，肺門・縦隔リンパ節に腺がんが認められた．術後に化学療法と放射線治療を行い，再発徴候なく，現在8年4カ月無再発生存中である．

キーワード 肺門縦隔リンパ節がん，原発不明

はじめに

がんの転移巣が先に発見され，その後の検索でも原発巣が見つけれないことを時に経験されるが，多くの症例は外科治療，化学療法，放射線治療で対応しても予後不良な経過をたどることが多い．その中で，原発不明肺門縦隔リンパ節がんは比較的良好で，再発を認めない報告例が散見されている．われわれは今回，原発不明で肺門縦隔リンパ節腺がんに対し，切除術を行い，がんが再発することなく長期生存が得られた症例を経験したので，若干の文献的考察を加えて報告する．

症 例

患 者：53歳，男性．

主 訴：胸部異常陰影の精査加療．

既往歴：特記すべきことなし．

家族歴：特記すべきことなし．

喫煙歴：15本/日×18年間．

現病歴：2000年6月の健診において胸部単純X線写真で胸部異常陰影を指摘され，静岡富士病院に紹介され，精査加療のため入院となった．

入院時現症：体重80kg，身長175cm，体温36.1℃，血圧120/80mmHg，脈拍77回/分・整．結膜に貧血・黄疸なく，表在リンパ節は触知しなかった．胸部聴診上，呼吸音は清で，腹部と四肢にも異常を認めず，浮腫もなかった．

血液生化学検査：血液一般生化学検査では異常所見はなかった．腫瘍マーカーはCEA182.9ng/ml，CYFRA5.4ng/mlで高値を示した．

血液ガス分析：pH7.439，pCO₂ 39.7mmHg，pO₂ 65.3mmHgで軽度の低酸素血症を呈していた．

入院時胸部単純X線写真（図1）：右肺門部に

国立病院機構静岡富士病院 呼吸器外科

別刷請求先：藤原清宏 国立病院機構静岡富士病院 呼吸器外科 〒418-0103 静岡県富士宮市上井出814

（平成20年12月2日受付，平成21年4月10日受理）

A Case Report of a Long-surviving Patient with Hilar and Mediastinal Lymph Node Carcinoma from an Unknown Primary Site

Kiyohiro Fujiwara, NHO Shizuoka Fuji Hospital

Key Words: hilar and mediastinal lymph node metastasis, unknown primary site